



東北地域における 大豆をめぐる事情

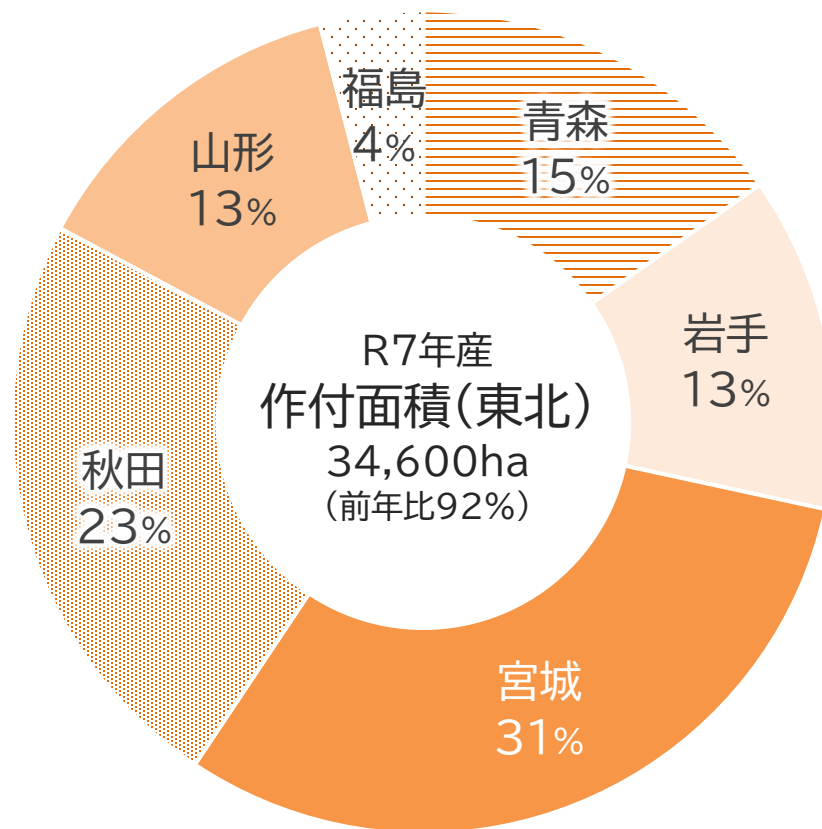
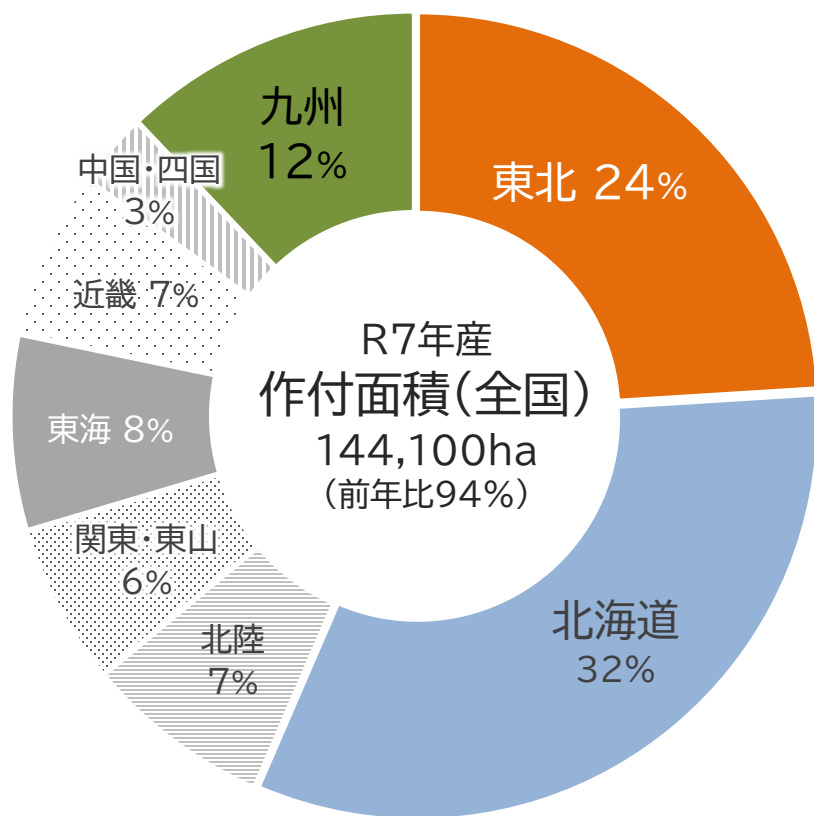
令和8年8月

東北農政局生産部生産振興課

1 作付面積

○ 東北地域の大豆の作付面積は、全国の作付面積の約1/4を占める一大産地であり、宮城県と秋田県で東北の54%となっている。

大豆の全国地域別及び東北各県別の作付面積の割合(R7年産)

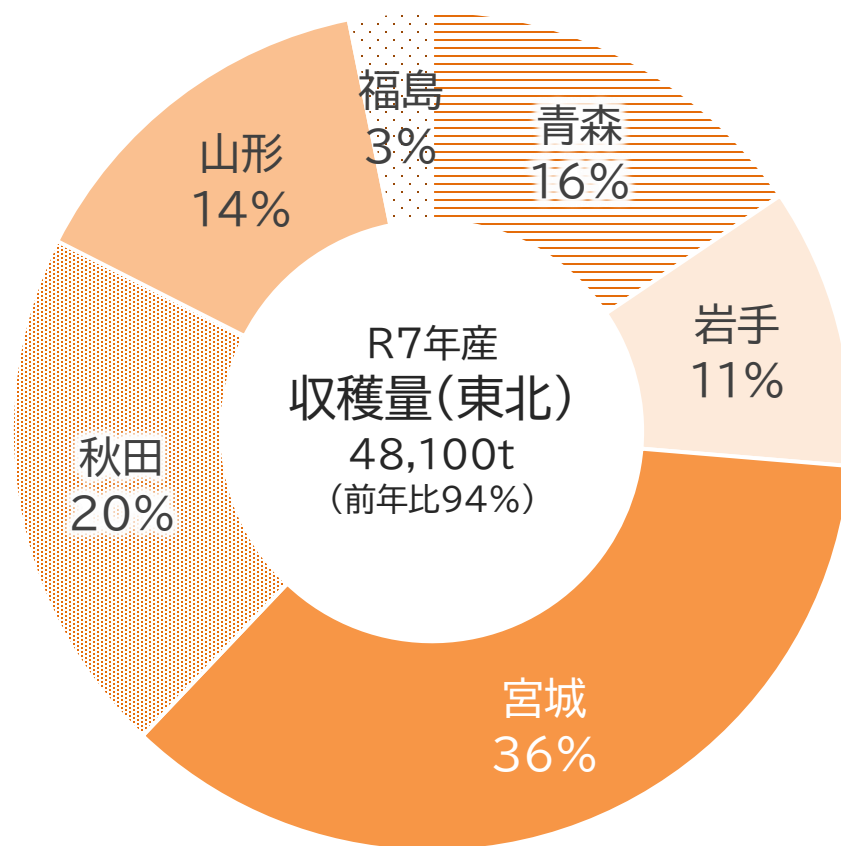
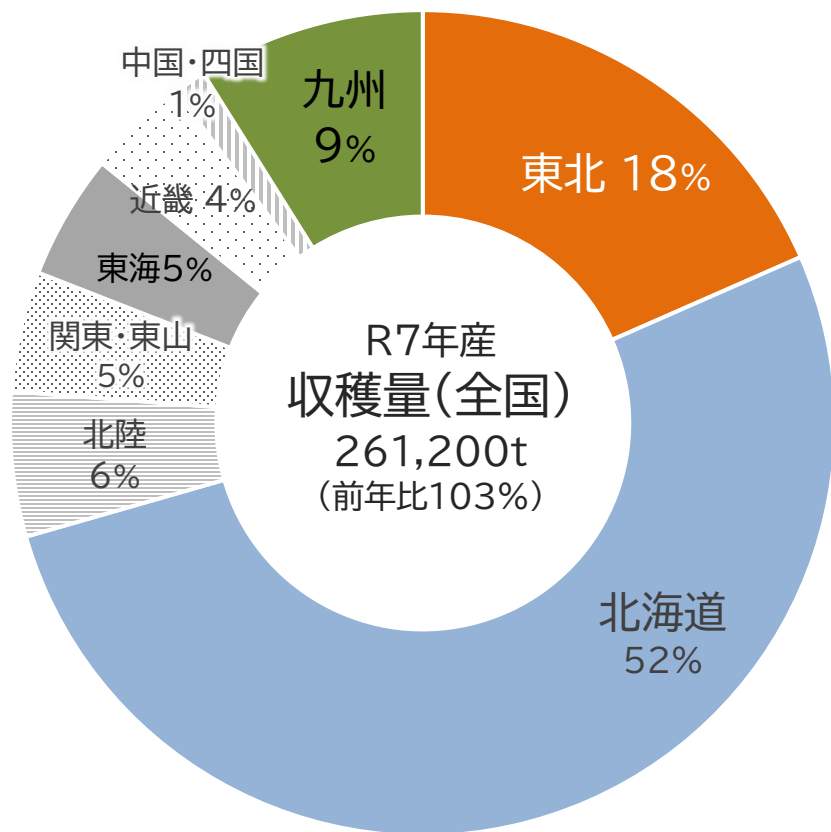


資料:農林水産省大臣官房統計部「作物統計」

2 収穫量

○ 東北地域大豆の収穫量は、全国の約18%を占めており、宮城県と秋田県で東北の56%となっている。

大豆の全国地域別及び東北各県別の収穫量の割合(R7年産)

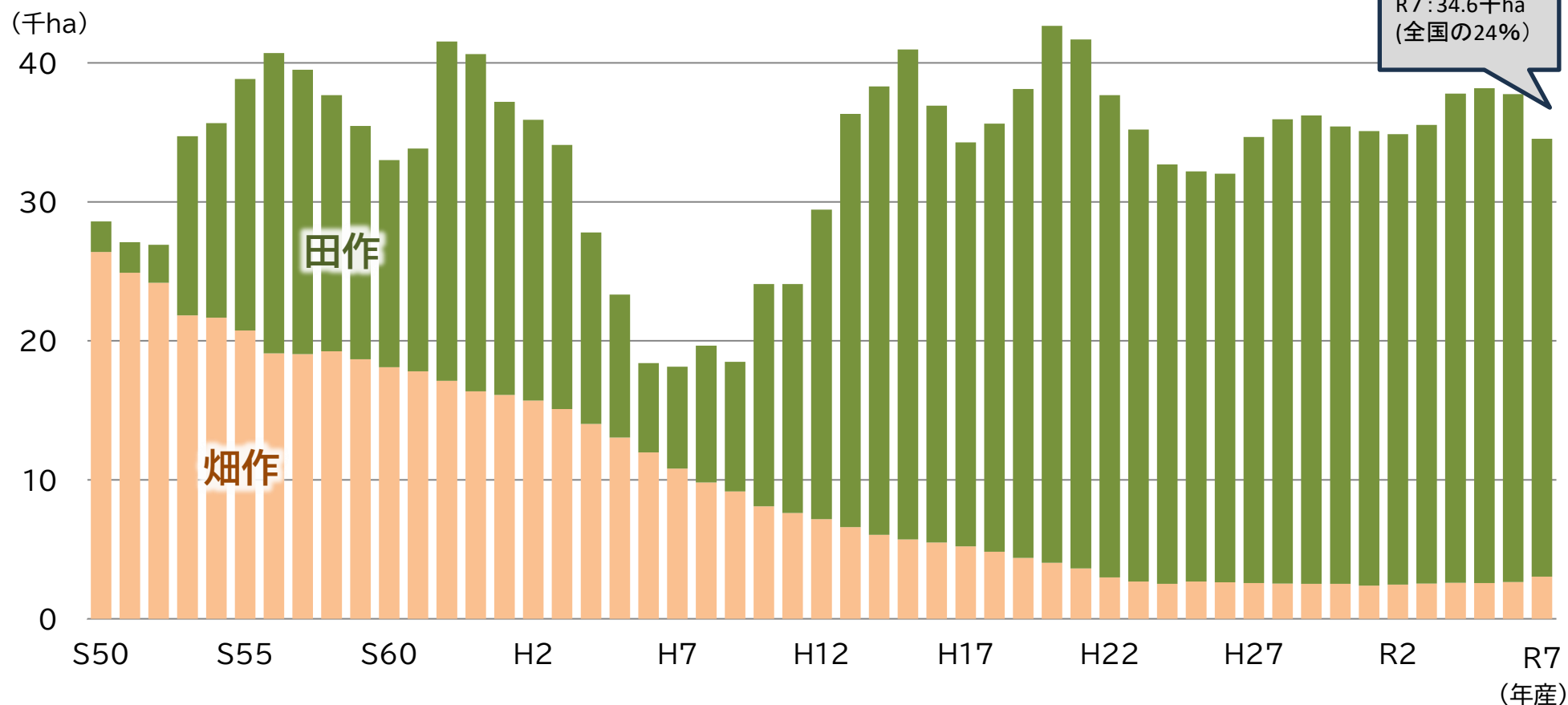


資料:農林水産省大臣官房統計部「作物統計」

3 作付面積の推移(東北地域)

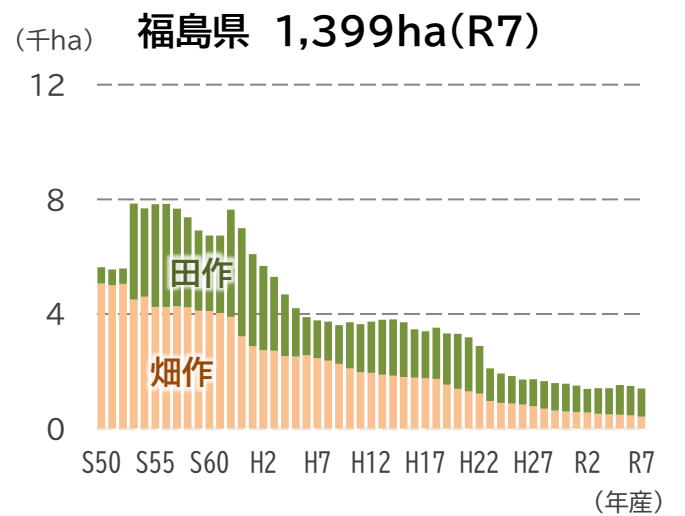
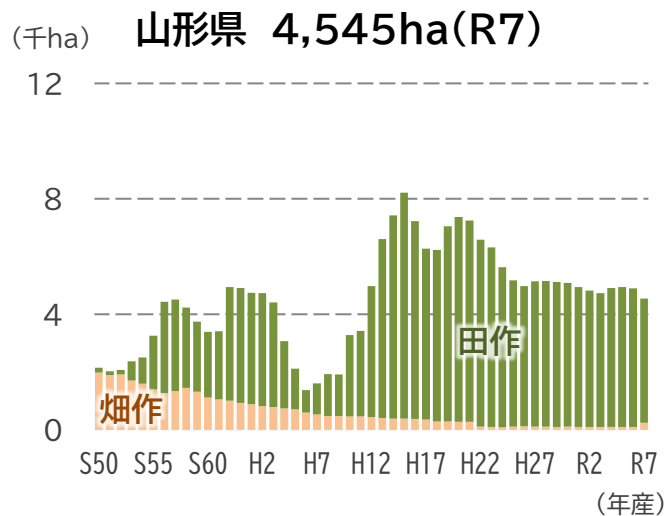
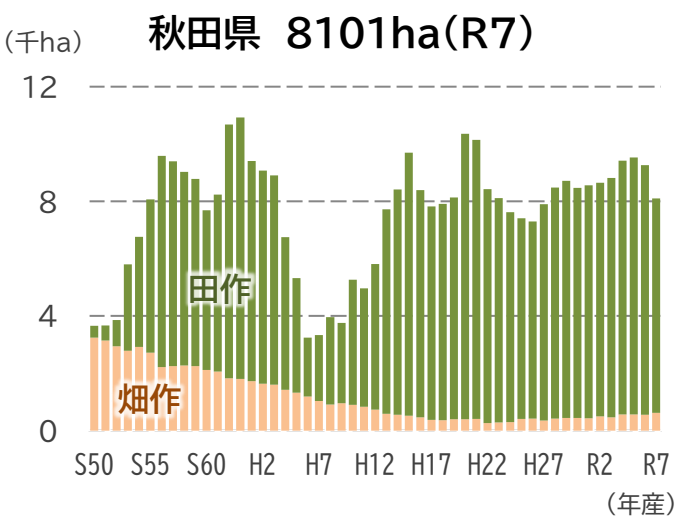
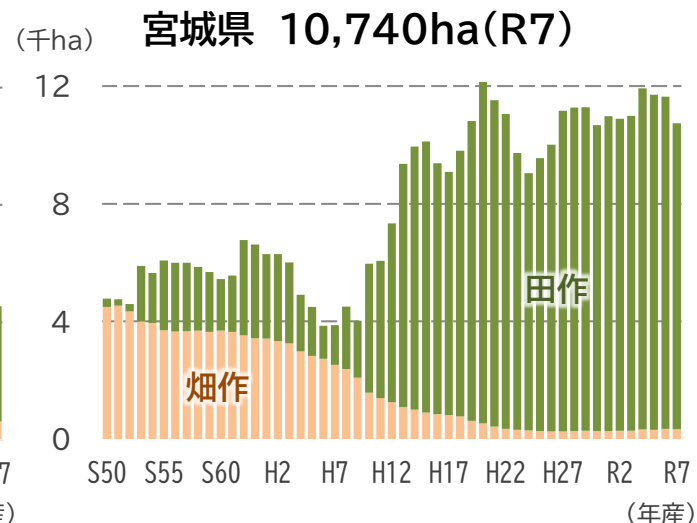
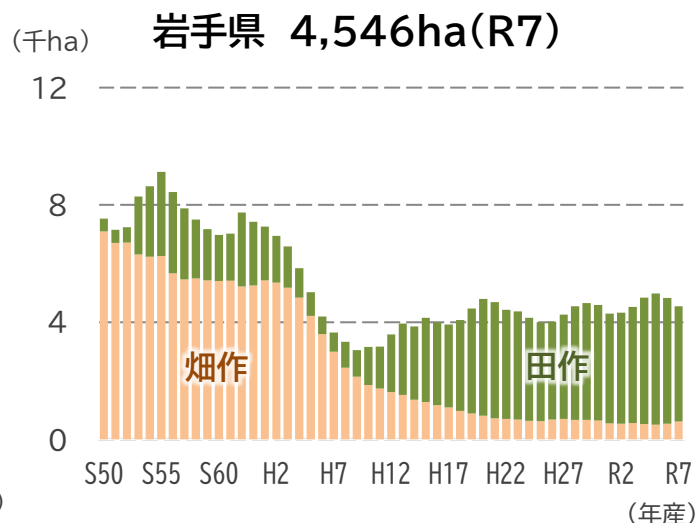
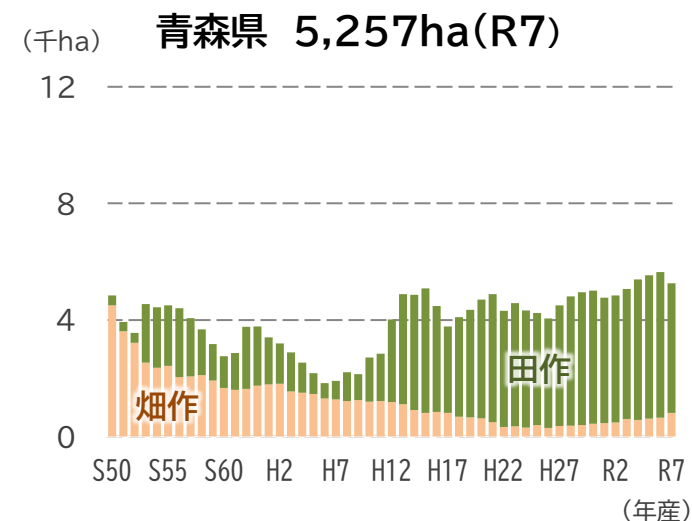
○ 大豆の作付面積は、近年は横ばいで推移していたが、前年比で令和4年産は6.2%増加、5年産は1.1%増加、6年産は1.0%減少、7年産は8.5%減少。

東北地域の大豆作付面積の推移



4 作付面積の推移(東北各県)

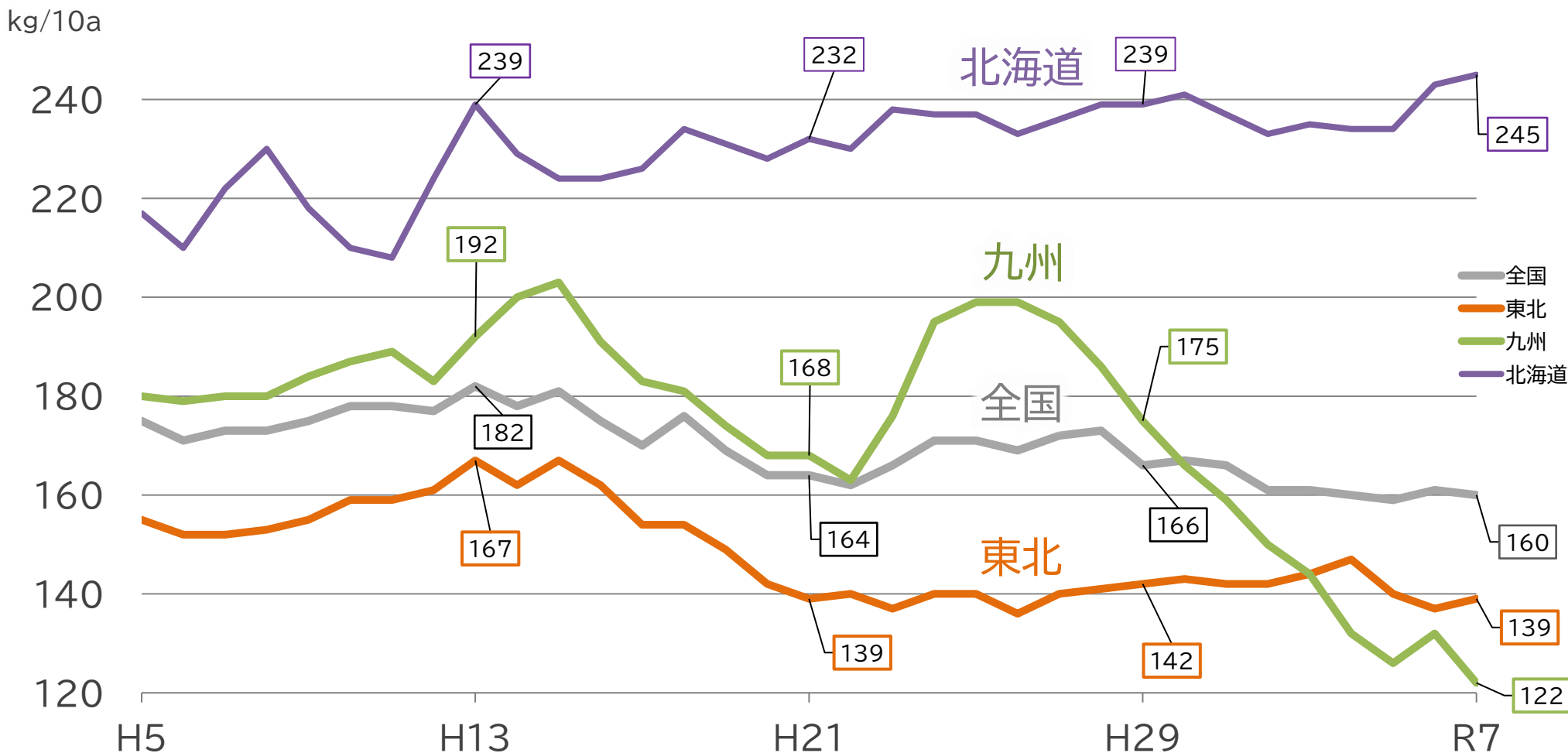
○ 東北各県の近年の作付面積は、概ね横ばいで推移してたが、令和4年産は東北全体で前年比6.2%、令和5年産は1.1%増加していたが、令和6年産は青森県以外は微減、令和7年産は東北全体で前年比8.5%減少。



5-1 平均収量の推移(東北地域) *平均収量:直近7か年(前年産起点)のうち最高及び最低を除いた5か年の平均値

○ 東北地域の平均収量は全国と比べて20～30kg/10a程度低く、H20年以降は140kg/10a前後で推移している。

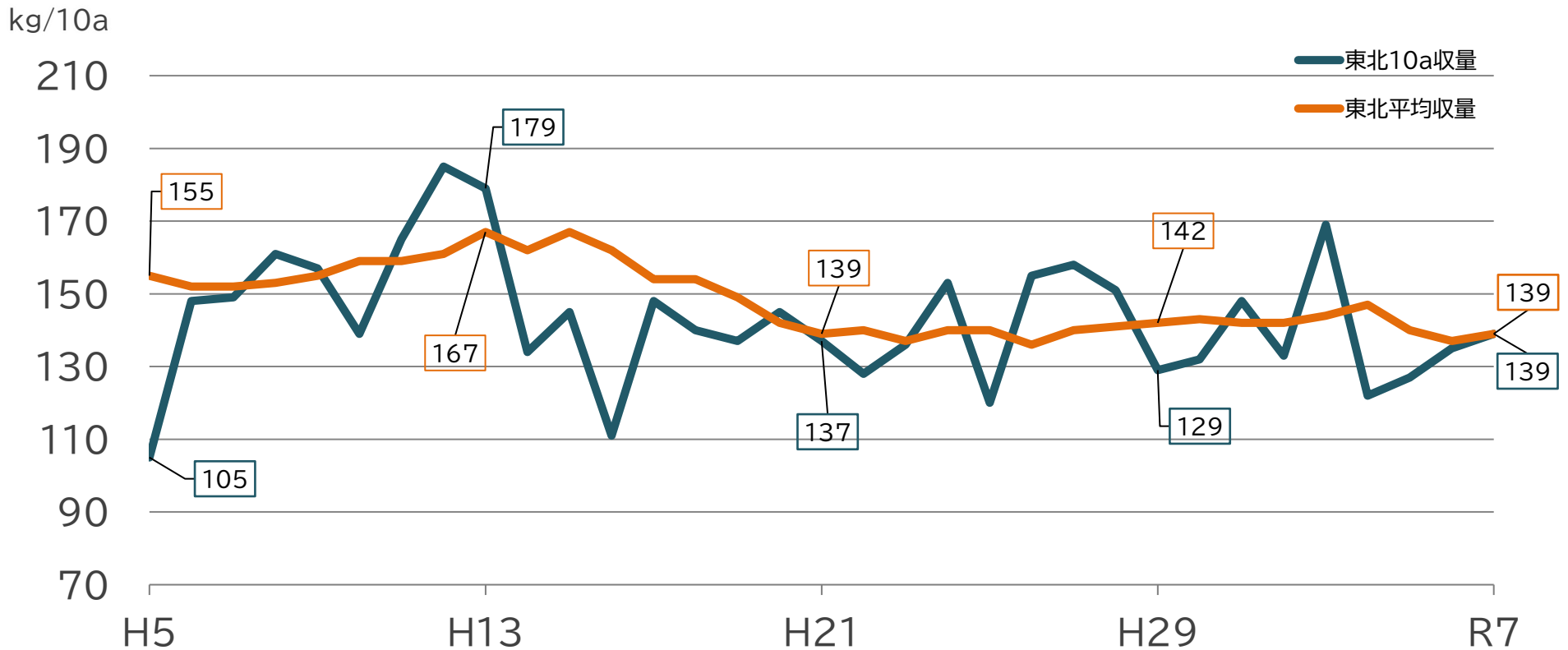
全国、北海道、東北地域及び九州地域の平均収量の推移



資料:農林水産省大臣官房統計部「作物統計」

5-2 10a当たり収量と平均収量の推移(東北地域)

○ 10a当たり収量は天候による影響を受け、年次変動が大きい状況。

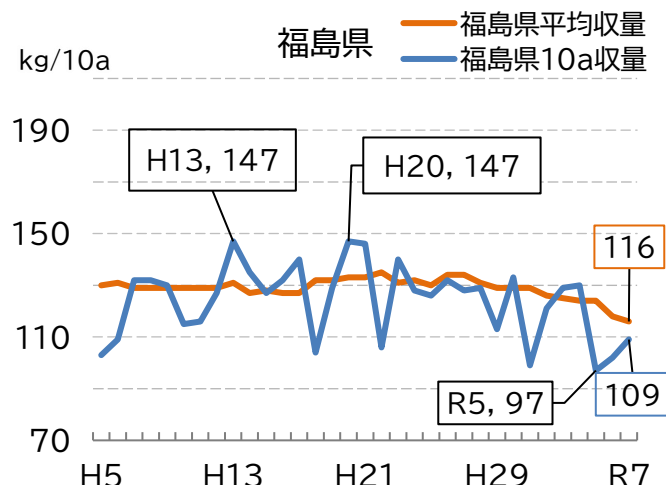
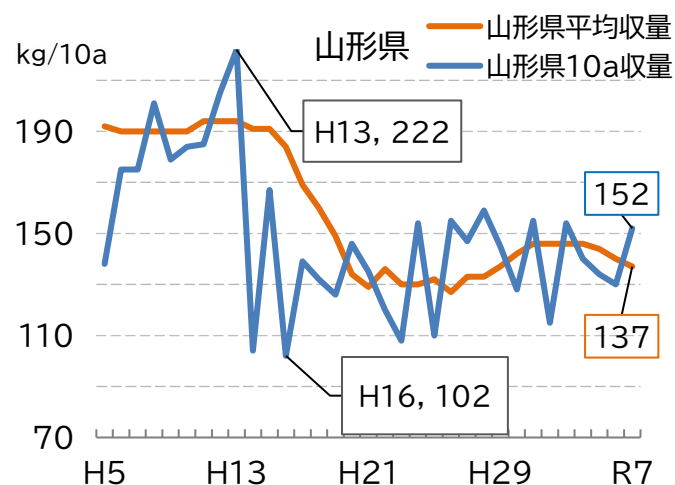
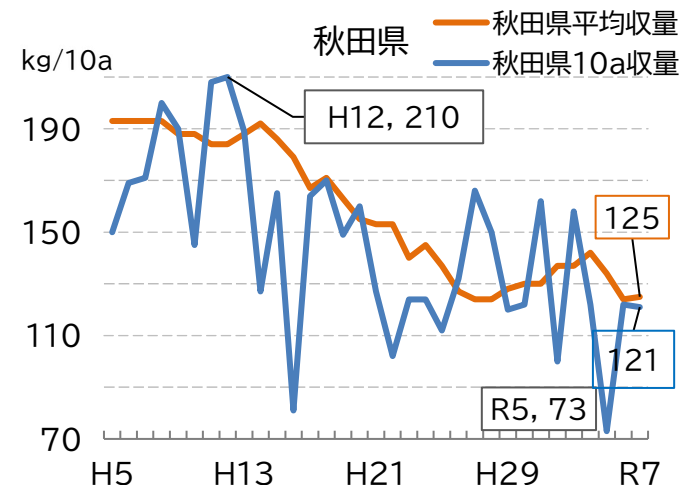
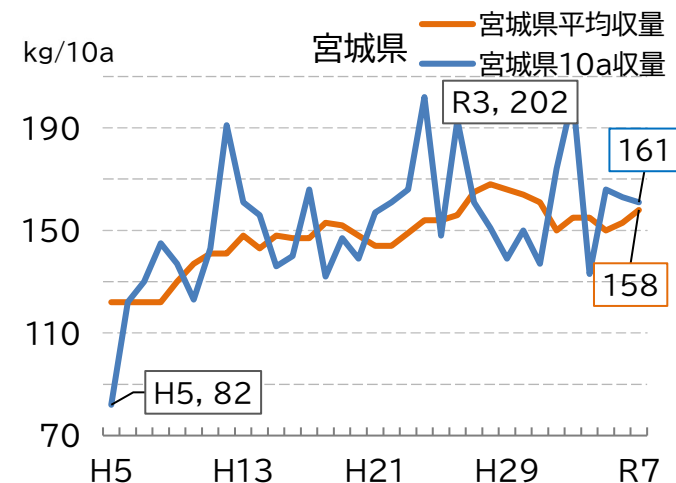
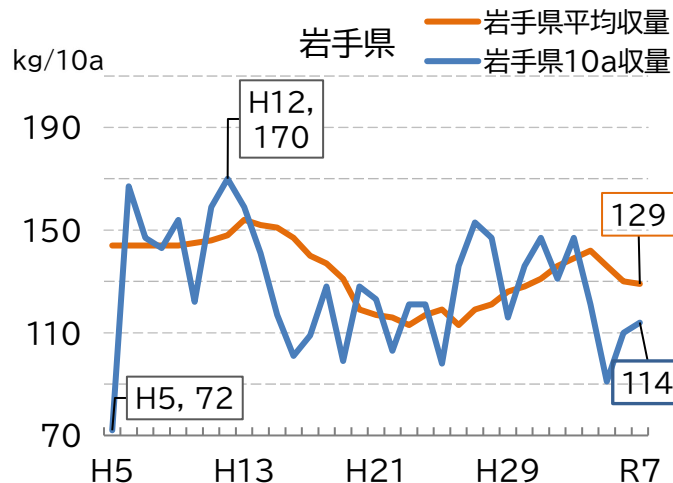
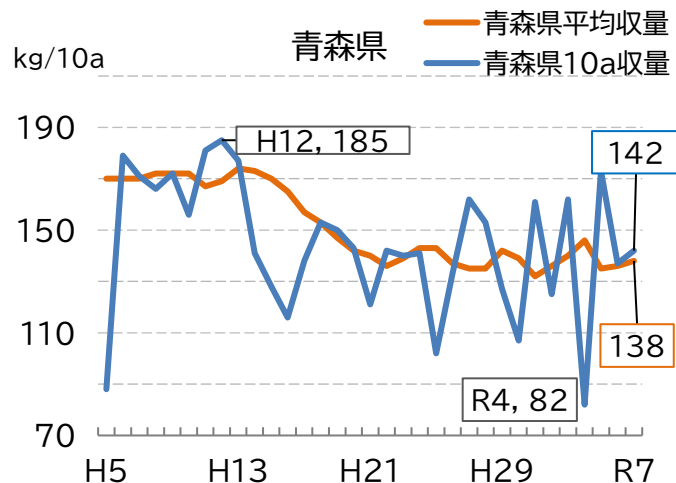


資料:農林水産省大臣官房統計部「作物統計」

5-3 10a当り収量と平均収量の推移(東北各県)

○ 近年の大豆の平均収量は、全国平均と比べて低い水準で推移している。

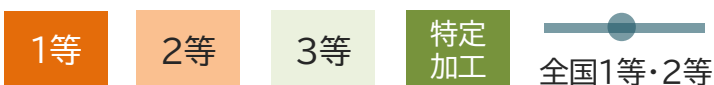
○ 10a当り収量は各県とも年次ごとの変動が大きい。



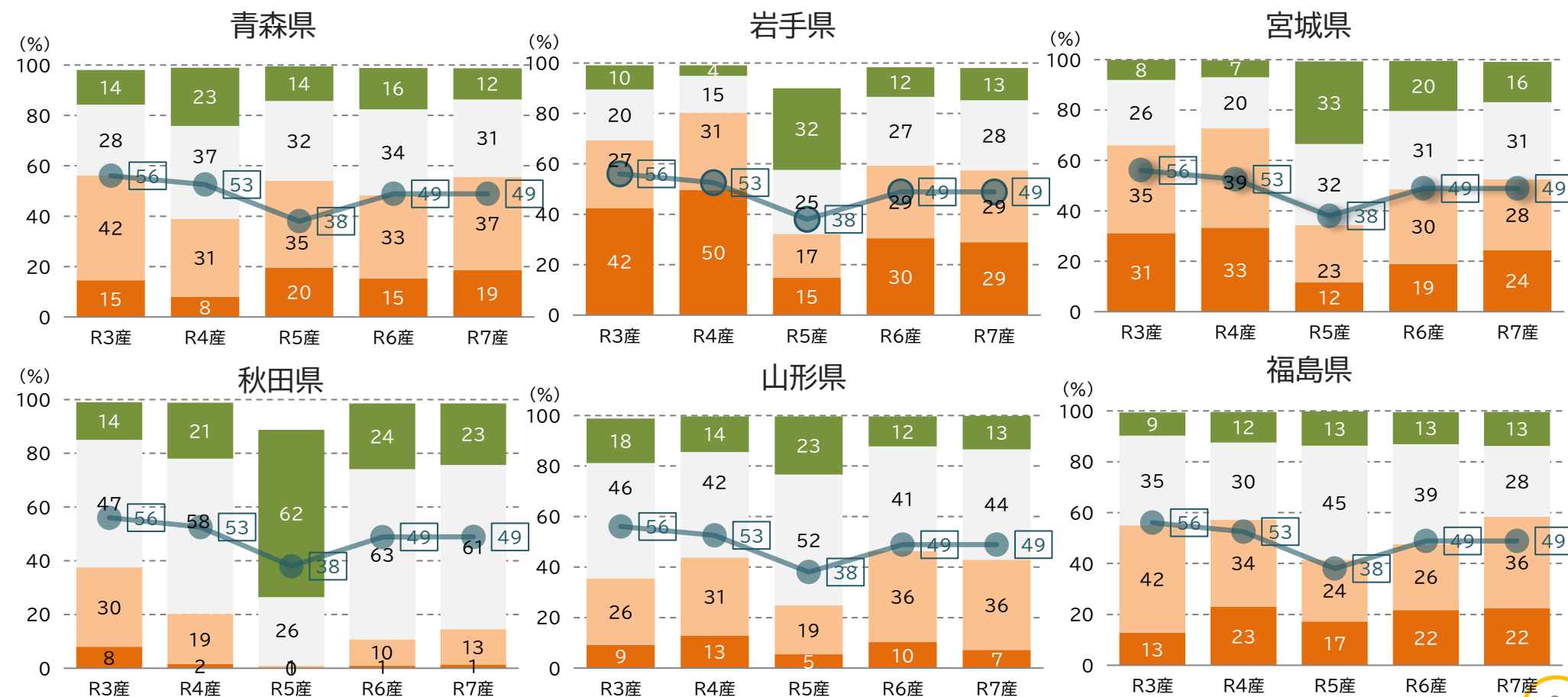
6 農産物検査結果(東北)

○ 令和7年産の1・2等(上位等級)比率は、青森県、岩手県、宮城県及び福島県が全国を上回り、秋田県及び山形県は下回った。

○ 令和7年産の主な品位格付理由(2等、3等及び規格外)は、形質、しわ粒である。



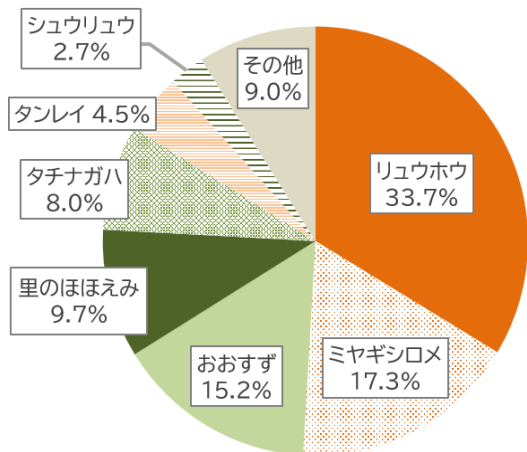
資料:農産物検査結果(令和8年4月末現在)
種子大豆は含まない
グラフに規格外は含まない



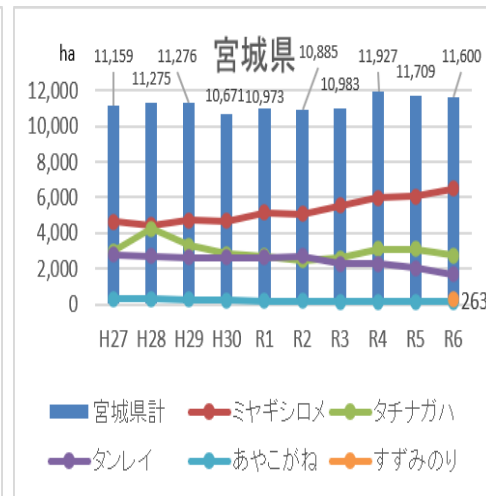
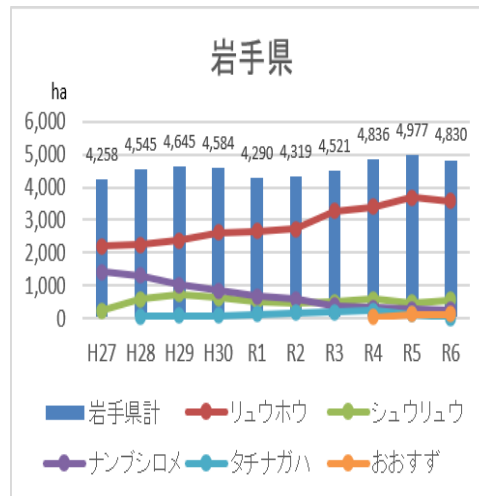
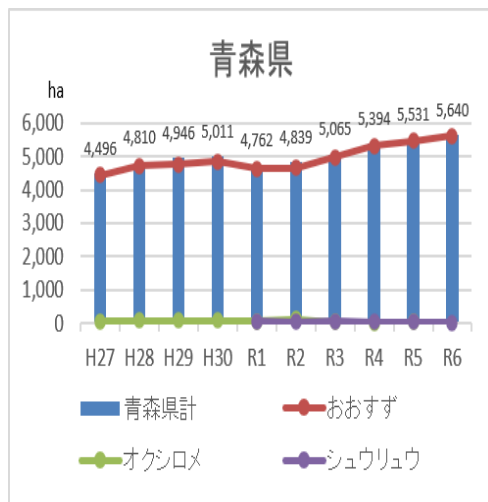
7 品種(東北)

- 東北地域では、各県で主力品種が異なり、多様な品種が作付けされている。
- 近年では、宮城県ではミヤギシロメ、山形県・福島県では里のほほえみの作付割合が増加している。

東北地域の作付品種の割合(R6年産)

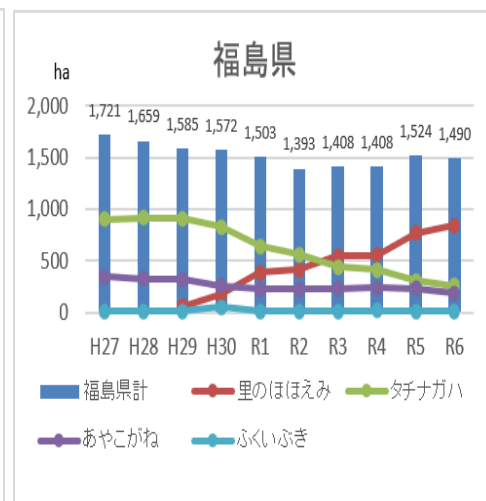
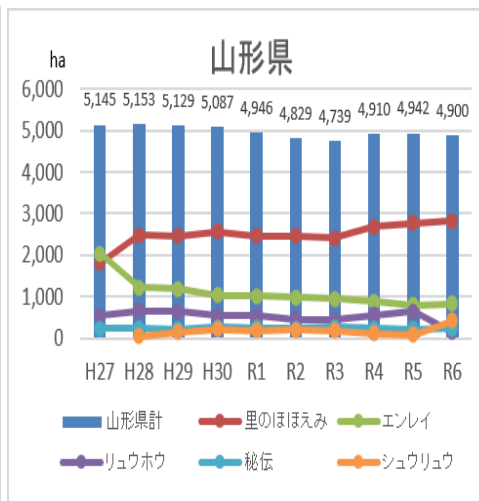
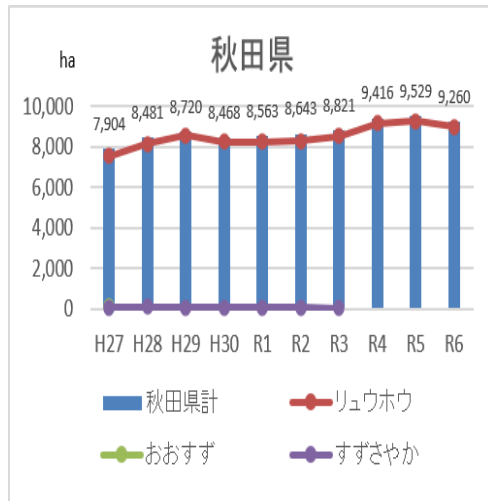


東北地域各県の大豆の主な作付品種の推移



東北各県の主な品種と作付割合(R6年産)

青森県		岩手県	
主な品種	作付割合	主な品種	作付割合
おおすず	100%	リュウホウ	74%
		シュウリュウ	12%
		ナンブシロメ	5%
宮城県		秋田県	
主な品種	作付割合	主な品種	作付割合
ミヤギシロメ	56%	リュウホウ	97%
タチナガハ	24%		
タンレイ	15%		
山形県		福島県	
主な品種	作付割合	主な品種	作付割合
里のほほえみ	58%	里のほほえみ	56%
エンレイ	17%	タチナガハ	17%
シュウリュウ	9%	あやこがね	12%



8 品種特性

品種名	用途（◎：主な用途）				加工適性	栽培特性
	煮豆	納豆	豆腐	味噌		
リュウホウ	○		◎		白目で百粒重が30g以上 豆腐や煮豆の加工適性に優れる	- 倒伏しにくく、莢もはじけにくい - ダイズシストセンチュウ抵抗性あり - 東北南部で発生するダイズモザイク病（C、D系統）には抵抗性がない
ミヤギシロメ	◎		◎	◎	大粒白目で百粒重が40g以上ある 種皮色が黄白で外観品質が優れる	- 生育が旺盛で節数が確保しやすく多収 - 立枯性病害、ダイズシストセンチュウに弱い
おおすず	○		◎		豆腐加工適性に優れる 粒が大きく、風味・柔らかさに優れ、煮豆にも適す	- 莢が短く倒伏しにくい - 東北南部で発生するダイズモザイク病（C、D系統）には抵抗性がない
里のほほえみ	○	○	◎	○	外観品質は「エンレイ」「スズユタカ」より良好 粗蛋白質含有率は「エンレイ」並の「高」、粗脂肪含有率「中」 豆腐、味噌、煮豆等の加工適正は「適」	- ダイズモザイクウイルス抵抗性「強」 - 倒伏抵抗性は強く、最下着莢節位高は高い - ダイズシストセンチュウには弱い
タチナガハ	◎		○		大粒で裂皮の発生が少なく、煮豆に適す 蛋白質含有率が中程度で豆腐の歩留まりが低め 小粒化した子実は、蛋白質含有率が低下する傾向	- 倒伏しにくく着莢位置が高い - 紫斑病抵抗性「強」 - ダイズモザイク病抵抗性「中」 - ダイズシストセンチュウ抵抗性「弱」
タンレイ			◎		豆腐加工に適し、食味が良い	- 倒伏しにくく、密植栽培に向く - ダイズモザイク病抵抗性「中」 - ダイズシストセンチュウ抵抗性「弱」
シュウリュウ	○	○	◎	○	子実は白目で、粒大は百粒重が30g以上の「大粒の小」 しわ粒の発生が「リュウホウ」より少ない 豆腐、煮豆、味噌などの加工に適す	- ダイズモザイクウイルス抵抗性「強」 - 収量が安定して多い - ダイズシストセンチュウに弱い - ベンタゾン液剤（莖葉処理除草剤）に感受性
エンレイ			◎	○	蛋白質含有率が高く、豆腐に適す 淡色味噌、赤味噌のどちらにも向く ウイルス病発生地帯では褐斑粒が発生	- 栽培適地が広い、晩播適応性あり - ダイズモザイク病抵抗性「中」 - ダイズシストセンチュウ抵抗性「弱」
あやこがね			◎	○	「スズユタカ」「エンレイ」並みに豆腐加工に適す 淡色味噌、赤味噌のどちらにも向く	- ダイズモザイク病抵抗性「強」、褐斑粒が少ない - 倒伏が少ない - ダイズシストセンチュウ抵抗性「弱」
そらびびき		○	◎	○	豆腐の原料大豆として適す	- 莢数が多く多収が期待できる - 難裂莢性であり、葉焼病抵抗性を有す - ダイズモザイクウイルスには感受性 - ダイズシストセンチュウには弱い

9 普及が期待される新品種の例

- 農研機構は、多収の米国品種と加工適性が高い日本品種を交配し、国内で普及している品種と比較して2割以上多収で、豆腐等への加工適性を有する新品種「そらみずき」、「そらみのり」、「そらひびき」、「そらたかく」を育成。
- 4品種とも、莢が弾けにくい性質(難裂莢性)を持ち、収穫時の脱粒損失等を抑制。
- そのうち「そらひびき」は東北南部～北陸地域が栽培適地。
- 多収品種により、国産大豆の安定生産と供給を加速化することが期待。

農研機構

倒れにくく収量が高い
莢がはじけにくい葉焼病に強い
豆腐加工に向いている

そらひびき

たくさんとれる大豆♪

栽培適地 東北南部～北陸地域



「そらひびき」現地実証試験（2023） 生産者ほ場における現地実証試験成績

試験条件	品種名	成熟期 (月/日)	倒伏	主莖長 (cm)	子実重 (kg/10a)	標準 対比	百粒重 (g)	タンパク 質(%)
山形県	2023 そらひびき	10/8	無	44	259	125	24.7	45.7
鶴岡市	リュウボウ	9/27	微	54	207	100	33.5	44.9
石川県 (A地区)	2022 そらひびき	10/10	少	44	226	138	23.9	42.2
白山市	里のほほえみ	10/18	少	65	164	100	30.4	44.0
	2023 そらひびき	10/9	微	49	342	128	26.1	42.5
	里のほほえみ	10/23	少	61	268	100	38.1	45.1
(B地区) 2023	そらひびき	10/10	微	43	326	106	25.8	44.8
	里のほほえみ	10/25	微	65	306	100	37.3	45.3

狭畦栽培

注) いずれの試験も実栽培規模(約30a)で、子実重はコンバイン収穫により評価した。
倒伏は 無、微、少、中、多、甚 の6段階にて評価した。
子実重の標準対比のうち、赤字で示したものは標準対比120%以上を示す。

「そらひびき」の特性 加工適性

品種名	タンパク質 含有率 (%)	豆乳 抽出率 (%)	豆腐の 破断強度 (g/cm ²)
そらひびき	42.1	78.8	70.5
フクユタカ	43.4	79.9	73.8



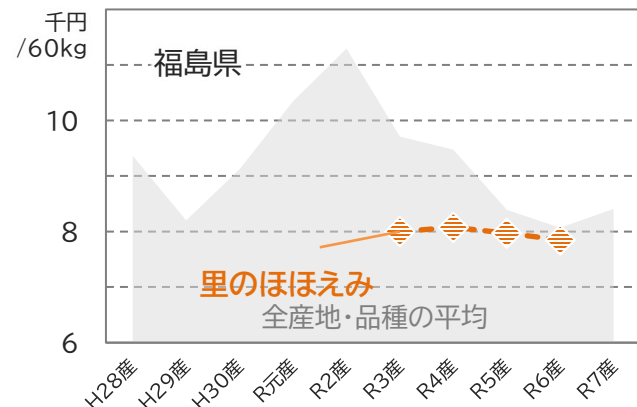
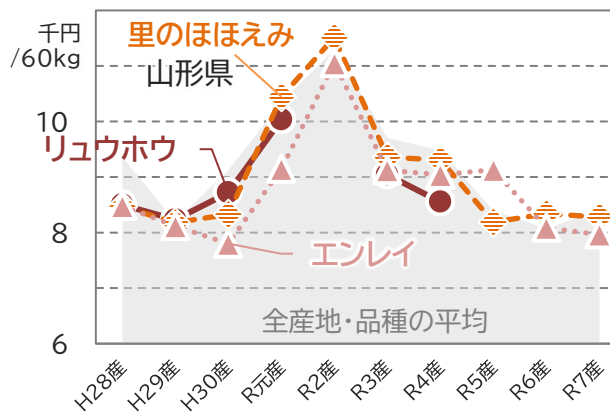
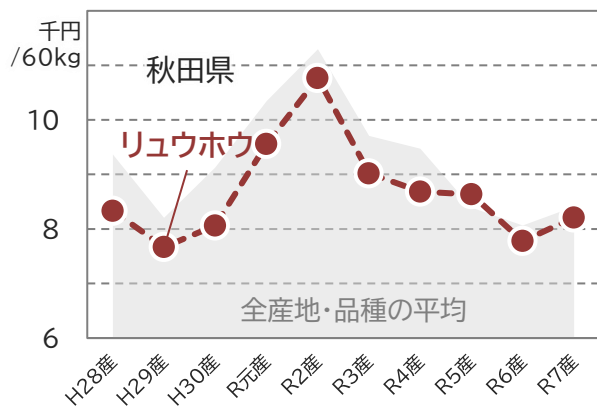
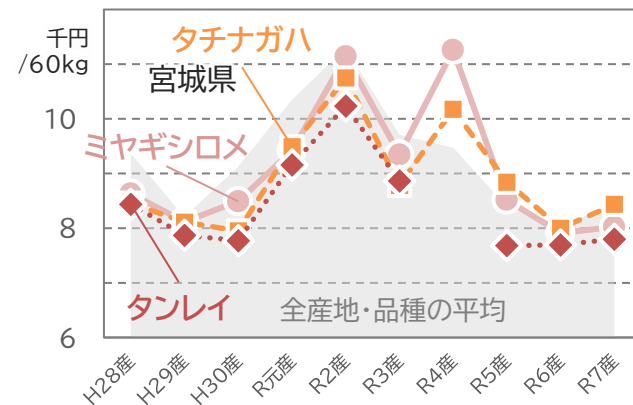
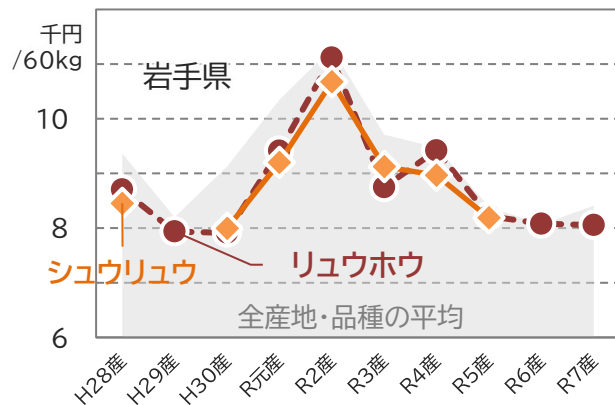
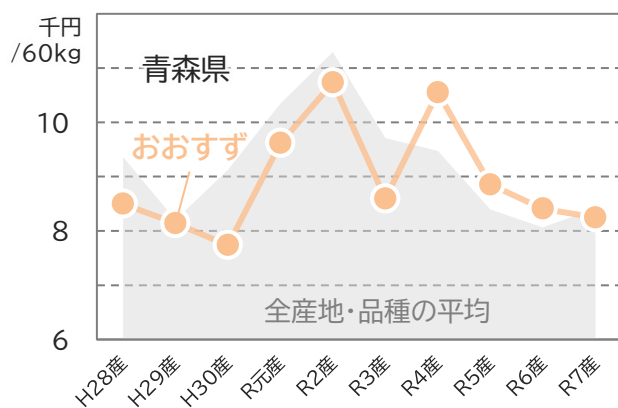
「そらひびき」の豆腐

育成地および現地試験生産物の第三者検査機関による豆腐加工試験で、豆腐適性が優れる「フクユタカ」と同等と評価。

10 入札取引価格(東北)

令和7年産の東北の主要品種の収穫後大豆入札取引の平均落札価格は宮城県のタチナガハが全国平均を上回った。

東北地域の産地・品種別の収穫後大豆入札取引に係る落札価格の推移



※岩手県のシュウリュウと福島県の里のほほえみは、上場はあったが落札が無かった。

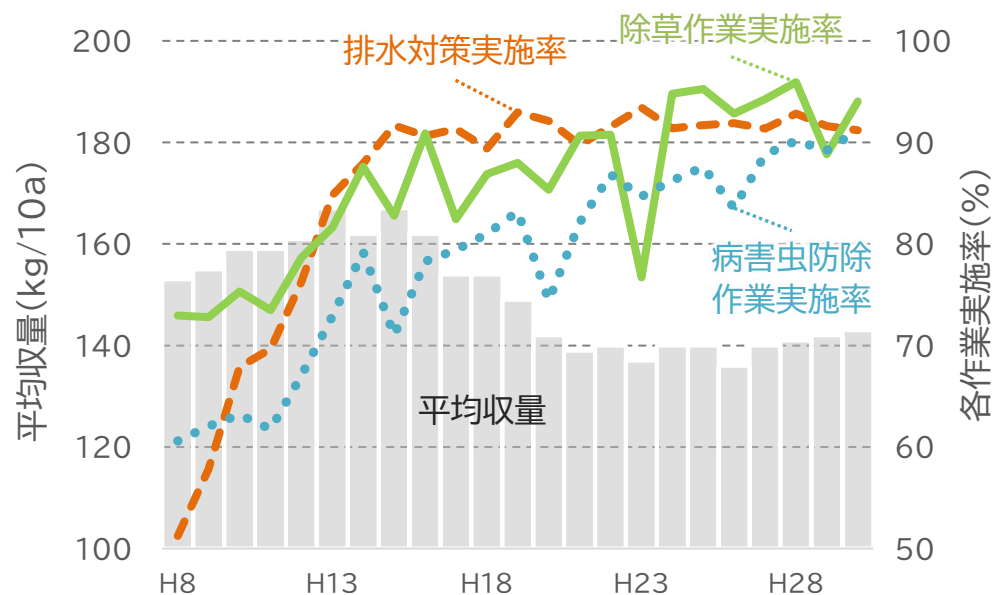
資料:公益財団法人日本特産農産物協会

「令和7年産大豆収穫後入札取引結果 総括表」から

11 単収の向上に向けて

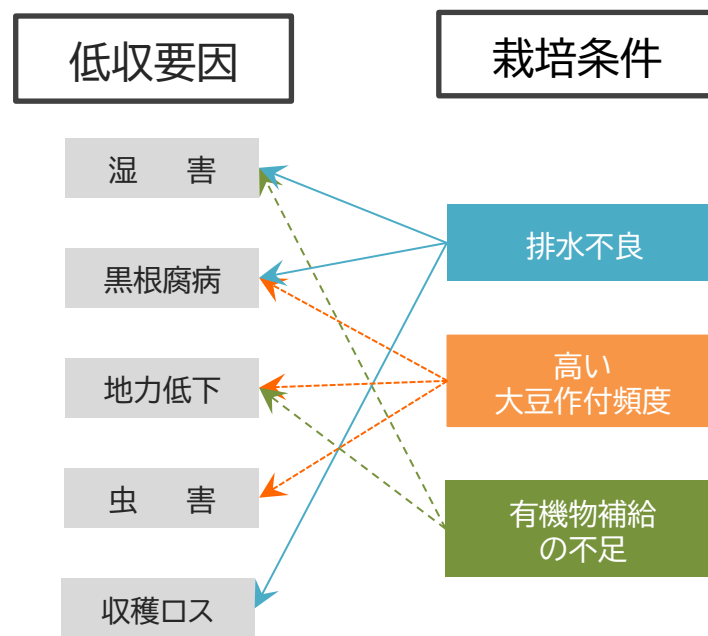
- 令和7年4月に閣議決定された「食料・農業・農村基本計画」において、2030年度における全国の大豆の生産努力目標を39万tに設定されたが、目標の達成には単収の向上が必要。
- 東北地域において、排水対策、除草作業、防除作業の実施率はそれぞれ9割を超えているが、単収の伸びには至っていない。
- 大豆の低収の要因として、有機物施用が不十分なこと、大豆作付頻度が増加していること等が関係しているとの報告もあり、これらへの対応も必要となっている。
- 多収を実現している生産者は、ブロックローテーションによる連作回避と併せて、堆肥の施用や緑肥の導入に取り組んでいる場合も多く、地力の維持に努めている。

東北地域の大豆の単収および各作業実施率の推移



資料: 平均収量は農林水産省大臣官房統計部「作物統計」
各作業実施率は農林水産省農産局穀物課調べ

大豆の低収要因調査結果



注: 「大豆・麦等生産体制緊急整備事業」
大豆・麦の低収要因解明に向けた調査(農研機構)より

「東北地域の大豆優良事例集」について

東北地域は、作付面積で全国の約 4 分の 1 を占める一大産地です。

しかし、単収は年次変動が大きく、長年にわたり、全国平均を下回っています。

そこで、生産者の取組改善に資する情報提供の一環として、過去の全国豆類経営改善共励会における受賞組織の情報を更新した東北の大豆生産組織の優良事例集を作成しています。

大豆は、収量・品質を確保することで収益を上げることができる作物であり、国産需要の高まりにより増産も期待されています。

「東北地域の大豆優良事例集」が、皆様の経営改善の一助になれば幸いです。

「東北地域における大豆をめぐる事情」のページの下に掲載しています。